

SYLLABUS

シ ラ バ ス

令和8年度後期

理学療法士科 2年次

医療法人社団 慈恵会

神戸総合医療専門学校

理学療法士科 教育課程（令和8年度後期）

2年次

科目名	単位数	時間数	学年	時期	科目名	単位数	時間数	学年	時期
倫理学	2	30	1	前期	理学療法評価学Ⅰ	1	30	1	後期
物理学	1	15	1	前期	理学療法評価学Ⅱ	1	30	1	後期
統計学	1	15	1	前期	理学療法評価学Ⅲ	1	30	1	後期
生物学	2	30	1	前期	理学療法評価学Ⅳ	1	30	2	前期
医学英語	2	30	1	前期	理学療法評価学Ⅴ	1	30	2	前期
保健体育Ⅰ	1	30	1	前期	理学療法評価学Ⅵ	1	30	2	前期
保健体育Ⅱ	1	30	1	後期	運動療法学Ⅰ	1	30	2	前期
情報処理演習	1	15	1	前期	運動療法学Ⅱ	1	30	2	前期
コミュニケーション論	2	30	1	後期	物理療法学Ⅰ	1	30	2	前期
キャリア教育Ⅰ	2	30	1	前期	物理療法学Ⅱ	1	30	2	後期
キャリア教育Ⅱ	1	15	3	前期	日常生活活動学Ⅰ	1	30	2	前期
解剖学Ⅰ	2	60	1	前期	日常生活活動学Ⅱ	1	30	2	後期
解剖学Ⅱ	1	30	1	後期	装具学	1	30	2	前期
解剖学演習Ⅰ	1	15	1	前期	義肢学	1	30	2	後期
解剖学演習Ⅱ	1	30	1	前期	運動器系理学療法学Ⅰ	1	30	2	前期
解剖学演習Ⅲ	1	30	1	後期	運動器系理学療法学Ⅱ	1	30	2	後期
生理学Ⅰ	1	30	1	前期	内部障害理学療法学Ⅰ	1	30	2	前期
生理学Ⅱ	1	30	1	後期	内部障害理学療法学Ⅱ	1	30	2	前期
生理学Ⅲ	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅰ	1	30	2	前期
運動生理学演習	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅱ	1	30	2	後期
運動学Ⅰ	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅲ	1	30	2	前期
運動学Ⅱ	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅳ	1	15	2	後期
運動学Ⅲ	1	30	1	後期	小児理学療法学	1	30	2	後期
人間発達学	1	30	1	前期	スポーツ障害理学療法学	1	30	2	後期
内科学Ⅰ	1	30	1	後期	疼痛理学療法学	1	30	2	後期
内科学Ⅱ	1	30	2	前期	理学療法臨床技能演習	1	30	2	後期
臨床心理学	1	30	1	前期	地域理学療法学総論	1	30	2	後期
精神医学	1	30	2	後期	生活環境学	1	30	2	後期
整形外科Ⅰ	1	30	2	前期	地域理学療法学各論	1	30	3	後期
整形外科Ⅱ	1	30	2	後期	臨床実習Ⅰ	1	45	1	後期
神経内科学Ⅰ	1	30	2	前期	臨床実習Ⅱ	3	135	2	後期
神経内科学Ⅱ	1	30	2	後期	臨床実習Ⅲ	7	315	3	前期
小児科学	1	15	1	後期	臨床実習Ⅳ	7	315	3	後期
一般臨床医学Ⅰ	1	30	2	前期	臨床実習Ⅴ	2	90	3	前期
一般臨床医学Ⅱ	1	30	2	後期	理学療法特論Ⅰ	1	30	1	前期
病理学概論	1	30	1	後期	理学療法特論Ⅱ	1	30	1	後期
臨床栄養学	1	15	2	前期	理学療法特論Ⅲ	1	30	2	前期
臨床薬学	1	15	2	前期	理学療法特論Ⅳ	1	30	2	後期
公衆衛生学	1	30	1	後期	総合理学療法学演習Ⅰ	3	90	3	前期
社会福祉学	1	30	1	後期	総合理学療法学演習Ⅱ	3	90	3	後期
リハビリテーション概論	1	30	1	前期					
リハビリテーション医学	1	30	2	後期					
理学療法概論Ⅰ	1	30	1	前期					
理学療法概論Ⅱ	1	30	2	前期					
臨床運動学	1	30	2	前期					
基礎理学療法学演習Ⅰ	1	30	1	後期					
基礎理学療法学演習Ⅱ	1	30	2	後期					
理学療法研究論	1	15	3	後期					
理学療法管理学Ⅰ	1	15	1	後期					
理学療法管理学Ⅱ	1	15	2	後期					

科目名		授業形態	担当教員名	
精神医学		講義	安田 昌弘	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
現代の疾病構造としても、精神疾患の理解は重要である。精神医学の対象は「こころ」あるいは「精神」であり、その領域は広い。 本講では、精神的な病気を理解するために必要な、精神症状学を中心とした基礎知識を身に付けることを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 精神障害の成因と分類が説明できる。 2. 代表的な精神機能とその異常について説明できる。 3. 精神機能と各疾患のつながりについて説明できる。 4. 各疾患への適切な対応について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	精神医学総論 精神医学とは			
2	精神機能の障害 意識 知覚			
3	精神機能の障害 感情 意志・欲動			
4	精神機能の障害 思考 自我			
5	統合失調症			
6	統合失調症			
7	気分障害			
8	神経症			
9	てんかん			
10	睡眠障害			
11	パーソナリティ障害			
12	精神作用物質			
13	精神作用物質			
14	発達障害			
15	精神科における治療 精神科医療と社会			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	80%	全2回実施 9回目の授業はじめ（1-8）、15回目の授業はじめ（9-14）		
レポート・課題				
小テスト	20%			
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
こころの健康がみえる		医療情報科学研究所	メディックメディア	
自由記載	その他必要に応じてプリントを配布する			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準精神医学 第9版		水野雅文 ほか	医学書院	
精神科・身体合併症のリハビリテーション 総合的治療計画から実践まで		平川淳一	協同医書出版社	
精神疾患が合併していても身体リハビリテーションはできる！		平川淳一 ほか	協同医書出版社	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
整形外科科学Ⅱ		講義	山川 亮・見川 隆三・松本 直也・ 三裏 菜緒花・石川 正雄・峯 貴文・佐藤 伸明	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
整形外科科学Ⅰに引き続き、理学療法の対象疾患の中心をなす整形外科疾患の診断法や治療法の原則を理解できるようになることを目的とする。また、疾患における病態・症状を理解できることで、整形外科疾患における理学療法との繋がりを自ら想像できるようになることを目的とする。				
授業の到達目標				
実践を念頭に、できる限り整形外科臨床に則した内容を理解し、整形外科的な常識を身につけることを目標とする。				
授業計画				
回	内容			
1	外傷総論 【松本】			
2	軟部組織損傷(筋・腱・靱帯損傷) 【見川】			
3	末梢神経損傷 【松本】			
4	骨折・脱臼① 【見川】			
5	骨折・脱臼② 【見川】			
6	股関節 【松本】			
7	膝関節 【見川】			
8	肘関節・手関節 【三裏】			
9	肩関節① 【峯】			
10	肩関節② 【峯】			
11	頸椎、胸郭 【佐藤】			
12	胸椎、腰椎 【佐藤】			
13	足関節と足 【石川】			
14	特殊な器具・器材を用いた手術法について① 【山川】			
15	特殊な器具・器材を用いた手術法について② 【山川】			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	90%	60%：松本・見川・三裏・山川、30%：峯・佐藤・石川		
レポート・課題				
小テスト	10%	講義内で10回確認テストを実施する		
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準整形外科学 第16版		田中栄・高木理彰 他	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
神経内科学Ⅱ		講義	劉 兆権	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間（ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
概論及び各論を通して、神経内科学の基本概念及び基本知識を理解してもらうことを目的としています。				
授業の到達目標				
・局在診断を説明できる。 ・代表的疾患の原因・症状・治療法・予後を説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	神経疾患各論（1）筋疾患1 筋ジストロフィー			
2	（2）筋疾患2 重症筋無力症			
3	（3）脱髄疾患 多発性硬化症			
4	（4）変性疾患 ALS			
5	（5）脊髄疾患			
6	（6）てんかん			
7	（7）感染性疾患			
8	小テスト			
9	神経外科領域関連知識			
10	神経疾患各論（8）中毒性疾患			
11	（9）平衡機能障害 症状及び検査			
12	神経疾患に多い合併症			
13	不思議な現象 サヴァン症候群、仮名と漢字			
14	復習1			
15	復習2			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	90%	局在診断を説明でき、代表的疾患の発症機序、症状を理解できる点を評価基準とする。		
レポート・課題				
小テスト				
その他	10%	疑問点や不明点について、積極的に質問し、活発に論議することを評価する。評価基準は別途示す。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学・作業療法学：専門基礎分野 神経内科学 第6版		川平和美	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
一般臨床医学Ⅱ		講義	水島 健太郎・末安 朋雄・岩井 克磨・野沢井 隆 郡司嶋 一輝・山本 雅美・岡田 誠暁・今川 由香	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
リハビリテーション分野では多岐にわたる疾患について幅広く診ていくことが必要であり、臨床医学とは診断の学びともいえる。この講義では、診断や評価に必要な検査の基礎と専門的な治療について、様々な専門職種の講義を受け、幅広い知識の習得に努めることを目的とする。				
授業の到達目標				
診断の手段としての超音波検査、X線、CT，MR Iなどの画像評価の基礎を学び説明できる。 また、人工透析器・人工呼吸器の知識、視機能の評価と治療、嚥下や認知機能の評価と治療、精神科作業療法、介護予防（口腔）などについて学び説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	レントゲンとCTの基礎（1）画像の原理、画像の見方			
2	レントゲンとCTの基礎（2）疾患別の画像解説			
3	レントゲンとCTの基礎（3）まとめと解説			
4	MR Iの基礎（1）MR Iの原理、MR I画像の種類と特徴			
5	MR Iの基礎（2）MR I画像の見方、疾患別の画像解説			
6	超音波画像① 内臓器			
7	超音波画像② 内臓器			
8	超音波画像③ 関節			
9	超音波画像④ 筋 軟部組織			
10	人工透析器について			
11	人工呼吸器について			
12	視覚・視野について			
13	嚥下障害・治療について			
14	精神科作業療法について			
15	介護予防（口腔）について			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	100%	テーマごとに課題を提出する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名		出版社名
なし				
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名		出版社名
自由記載				
備考				
解剖学・生理学をしっかり復習しておくこと				

科目名		授業形態	担当教員名	
リハビリテーション医学		講義	坂東 恵美子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
リハビリテーション医学の対象は、障害を持つ人及び障害を生じる可能性のある人々である。そのような対象者に共通する医学的事項について知り、理解できるようになることを目的とする。				
授業の到達目標				
・臨床医学とリハビリテーション医学の違いを説明できる。 ・リハビリテーション診療の概要を説明できる。 ・治療などで患者の体に入り出している管について列挙できる。 ・リスク管理の必要性を認識する。 ・運動発達検査を説明できる。 ・痙縮・固縮、褥瘡、浮腫、熱傷等リハビリテーションの対象となる疾患・障害とそのリハビリテーションについて述べることができる。				
授業計画				
回	内容			
1	オリエンテーション 臨床医学とリハビリテーション医学の差異			
2	リハビリテーション医療の3タイプ 4つの医療機能役割 リハビリテーション医学関係略語			
3	リハビリテーション診療①			
4	リハビリテーション診療②、 記録について（SOAP演習）			
5	カテーテル総論・各論			
6	リスクマネジメント1:ベッド周辺のコードについて			
7	リスクマネジメント2:リハビリテーションの中止基準、他			
8	姿勢反射、発達検査各論 演習(反射、GMFM、GMFCS、その他)			
9	痙縮・固縮の治療と理学療法			
10	末梢循環障害と浮腫			
11	浮腫の理学療法			
12	褥瘡と理学療法			
13	熱傷とその理学療法			
14	知っておきたい疾患・障害とリハビリテーション①			
15	知っておきたい疾患・障害とリハビリテーション② まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	50%			
レポート・課題	50%	不定期で課題を数回提出する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載	適宜資料を配布する			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
最新リハビリテーション医学 第3版		安保雅博・上月正博他 編	医歯薬出版社	
Crosslink basic リハビリテーションテキスト リハビリテーション医学		上月正博・高橋仁美 編	メジカルビュー社	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
基礎理学療法学演習Ⅱ		演習・講義	小林 正明・谷 和真・坂東 恵美子・小堀 博史	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
実習における理学療法評価・治療の実施を見据え、対象者との対応・問診、症例情報の整理、症例あるいはペーパーパーシェントを通しての統合と解釈の実験を経験し、その大切さを認識する。また実習における記録の方法を修得する。				
授業の到達目標				
1. 臨床実習の目的や課題内容が説明できる。 2. 症例情報を整理して、症例の全体像が説明できる。 3. 理学療法評価、統合と解釈、治療の立案までの流れを経験し、調べたことも含めて、障害像について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	講義オリエンテーション、評価実習・長期実習とは(1)			
2	評価実習・長期実習とは(2)、患者情報の分類(1)			
3	患者情報の分類(2)			
4	ケーススタディ(関連施設の利用者様から学ぶ)オリエンテーション			
5	症例情報から考える仮説・検査項目の立案			
6	動作観察から考える仮説・検査項目の立案			
7	検査結果を整理しSOAPでの記録を学ぶ			
8	ケーススタディ 利用者様から学ぶ （関連施設での実習）(1)			
9	ケーススタディ 利用者様から学ぶ （関連施設での実習）(2)			
10	症例レポート・発表用レジュメについて ケーススタディ 症例に基づく学修(1)			
11	ケーススタディ 症例に基づく学修(2) 情報をICFで整理			
12	ケーススタディ 症例に基づく学修(3) 症例レポートの統合と解釈を学ぶ			
13	ケーススタディ 症例に基づく学修(4) 統合と解釈の例示、最終評価結果の提示			
14	ケーススタディ 症例に基づく学修(5) 症例レポートの考察を学ぶ(1) 発表用レジュメを学ぶ			
15	症例レポートの考察を学ぶ(2) ・ 臨床実習に向けたまとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	60%	講義中に出される課題、レポートを評価する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他	40%	関連施設での実習へ取り組む姿勢や提出物を評価する(実習前後の準備や振り返りも含める)。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学 第4版		内山靖	医学書院	
自由記載				
備考				
これまでに学んだ疾患・理学療法評価・治療に関する知識も必要です。事前にアナウンスするので、必要と思う資料を各自準備すること。				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法管理学Ⅱ		講義	坂東 恵美子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
15 時間 （ 1 単位）		8 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
臨床現場において理学療法士には広義の「管理」という視点が必要であり、危機を防ぐマネジメント能力が不可欠である。本講義では、1年次の理学療法管理学Ⅰでの知識を基に、臨床現場において必要なマネジメントやリスク管理を理解し、職業倫理を高めることを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 職業倫理、職場管理について理解し説明できる。 2. 自己管理に必要な知識を習得し、自己の管理が十分できる。 3. 臨床実習におけるマネジメントを理解し、臨床実習で活かすことができる。				
授業計画				
回	内容			
1	理学療法管理学の概要 管理・マネジメント：5つの要素 信頼			
2	理学療法士の職場管理(1) 自己管理			
3	理学療法士の職場管理(2) 人・モノ・情報の管理			
4	理学療法士の職業倫理(1) 専門職 コンプライアンス 医療倫理			
5	理学療法士の職業倫理(2) 倫理観 職業倫理ガイドライン 医療広告ガイドライン			
6	臨床実習に向けて(1) リスクマネジメント			
7	臨床実習に向けて(2) 臨床実習での自己管理			
8	臨床実習に向けて(3) 臨床実習の心得 まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	60%	単元ごとの課題、および最終課題		
小テスト				
その他	40%	各回の講義準備物の状況、講義録の提出、グループワーク時のテーマに沿った積極的な発言		
自由記載		各々の評価基準は別途示す。 再試験については開講学期のみとする。		
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
理学療法管理学（1年次購入済み）		奈良勲・他 編著	（株）医歯薬出版	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				
1年後期科目「理学療法管理学Ⅰ」の「講義録・課題のファイル」を毎回持参すること。				

科目名		授業形態	担当教員名	
物理療法学Ⅱ		演習・講義	福林 秀幸	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
物理療法は物理学的な現象を治療に応用するものであり、基本的な物理学の知識は必須である。授業ではできるかぎり簡単にそれぞれの必要な物理学の知識について説明をし、その応用としての物理療法（電気・牽引・マッサージ）の基本的技術適応、禁忌、方法等を演習を交えながら行う。				
授業の到達目標				
物理療法の仕組みを理解し、症状に併せた治療方法を選択できるようになる。自ら機器を実際に使用する事で実際の治療現場を意識することができるようになる。				
授業計画				
回	内容			
1	超音波療法(1) 超音波の基礎			
2	超音波療法(2) 超音波各論			
3	超音波療法 演習			
4	電気刺激療法(1) 低周波			
5	電気刺激療法(2) TENS			
6	電気刺激療法(3) 小テスト 1回目 神経筋電気刺激			
7	電気刺激療法(4) 機能的電気刺激			
8	電気刺激療法 演習			
9	牽引療法 基礎と臨床			
10	牽引療法 演習			
11	マッサージ療法			
12	マッサージ療法 演習			
13	ケーススタディ(1)			
14	ケーススタディ(2)			
15	後期のまとめ 小テスト 2回目			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	80%			
レポート・課題				
小テスト	20%			
その他				
自由記載	定期試験と小テストを合わせて総合評価し、60点以下を再試験とする。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 物理療法学・実習		石川朗 他	中山書店	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
日常生活活動学Ⅱ		講義・演習	谷 和真・荒木 渚	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間（ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
リハビリテーション医学の中で日常生活活動（ADL）は大きな領域をしめる。リハビリテーションチームの一員である理学療法士として、姿勢・動作の基礎知識、日常生活動作の基礎知識を理解し、それらの介助方法を修得できるようになることを目的とする。また、各論として各疾患別のADLの特徴、指導について学習する。				
授業の到達目標				
基本動作の特徴を理解し説明できる。 基本的な介助方法を安全に実施できる。 各疾患のADLの特徴について説明できる。 各疾患の基本動作などの指導・介助法を実施できる。				
授業計画				
回	内容			
1	基本動作について			
2	基本動作の介助 ベッド上移動			
3	基本動作の介助 寝返り、起き上がり			
4	基本動作の介助 立ち上がり、移乗動作			
5	基本動作の指導			
6	脊髄損傷のADL① 特徴			
7	脊髄損傷のADL② 指導と演習			
8	関節リウマチのADL			
9	視覚障害者のADL			
10	人工股関節置換術・下肢切断のADL			
11	呼吸器・循環器疾患、神経筋疾患のADL			
12	片麻痺のADL① 特徴			
13	片麻痺のADL② 指導と演習			
14	実技テスト			
15	まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	70%			
レポート・課題				
小テスト				
その他	30%	実技テスト		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学専門分野 日常生活活動・生活環境学 第7版		鶴見隆正・隆島研吾 編集	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
シンプル理学療法学シリーズ 日常生活活動学テキスト 改訂第3版		細田多穂 監修	南江堂	
イラストによる安全な動作介助のてびき 第4版		飛松好子 編著	医歯薬出版	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
義肢学		講義	鮫島 一雄・越智 貴則	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
義肢装具の概要を理解し、臨床において対象者の障害、症状などとの関連を総合的に考えられるようにする。また、対象者に適合する義肢装具の選択やニーズを考えられる基礎を理解する。				
授業の到達目標				
・切断の原因を理解する・切断後の断端管理の手法を理解する。・義足の種類と構造、適応を理解する。・義手の種類と構造を理解する。・義足のアライメント調整を説明できる。・義足の適合判定チェックアウトを説明できる。・切断者の異常歩行とその原因を理解する。・スポーツ、最先端義肢を知る。				
授業計画				
回	内容			
1	オリエンテーション 義肢学総論 ビデオ鑑賞			
2	切断と離断、固有名詞の切断名、特殊な切断名 福祉用具			
3	切断者の疫学 義肢の種類			
4	義肢の分類 断端管理 (小テスト)			
5	切断後のリハの流れ アライメント ソケットの役割			
6	大腿義足のソケット (3つのソケットと四辺形・坐骨収納型)			
7	膝継手、足継手 膝義足、サイム切断の長所短所 (小テスト)			
8	下腿義足			
9	股離断・片側骨盤切除の義足構造 足部切断			
10	3つのアライメントチェックアウト (小テスト)			
11	カナダ式股義足のアライメント			
12	切断の評価、（義足装着後理学療法）			
13	上肢切断の評価と義手 (小テスト)			
14	義肢最先端リハビリテーション、大腿・下腿義足のダイナミックアライメント			
15	下肢切断の機能障害と義足装着前・後理学療法 応用動作			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	60%			
レポート・課題				
小テスト	40%	授業中に4回実施		
その他				
自由記載	定期試験と小テストを合わせて総合評価する			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
15レクチャーシリーズ理学療法テキスト義肢学第2版		石川朗 編	中山書店	
義肢学演習資料32期生		担当教員作成分		
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
運動器系理学療法学Ⅱ		講義・演習	児島 章	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
各骨関節疾患の特徴・症状を学んだうえで、理学療法士としてできる評価・治療を考えられるよう講義をすすめていく。				
授業の到達目標				
医学的知識の裏付けを基に、骨関節疾患に対する障害像の把握と障害発生要因を理解する。その上で、理学療法の評価を、実習を通し出来るだけ実践的に学び、疾患に対する問題点の想起が出来ることを目標とする。				
授業計画				
回	内容			
1	膝の靱帯損傷(1)			
2	膝の靱帯損傷(2)			
3	膝の靱帯損傷(3)			
4	腰痛について(1)			
5	腰痛について(2)			
6	腰痛について(3)			
7	腰痛について(4)			
8	頸椎と頸髄疾患について(1)			
9	頸椎と頸髄疾患について(2)			
10	頸椎と頸髄疾患について(3)			
11	肩関節疾患について(1)			
12	肩関節疾患について(2)			
13	肩関節疾患について(3)			
14	肩関節疾患について(4)			
15	模擬患者			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%	整形外科疾患の病態や治療が理解できているかを評価する。		
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
ここがポイント！整形外科疾患の理学療法 3版		富士武史 監修	金原出版	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
機能解剖学的触診技術 上肢		青木隆明 監修	メジカルビュー社	
機能解剖学的触診技術 下肢		青木隆明 監修	メジカルビュー社	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
中枢神経系理学療法学Ⅱ		講義・演習	前川 加奈・谷 和真・金森 慎治	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
脳血管障害における病態や症状を理解するため、中枢神経系の機能と構造について知識の整理と修得を行う。適切な理学療法の検査・測定、リスク管理、治療立案までの一連の流れを知り、修得することを目的とする。				
授業の到達目標				
中枢神経系の構造と機能についての基礎知識を整理し、運動と感覚の関係性や伴う障害について説明ができるようになる。また、疾患から生じる機能障害および能力障害の評価方法や、治療までの一連の流れを理解できるようになる。				
授業計画				
回	内容			
1	脳画像① 脳画像の基本			
2	脳画像② 脳の画像解剖			
3	脳血管障害の症状と理学療法① 時期別リハビリテーション			
4	脳血管障害の症状と理学療法② 脳卒中後の疼痛、姿勢定位障害			
5	脳血管障害の症状と理学療法③ 各種治療			
6	脳血管障害の症状と理学療法④ 歩行障害			
7	ケーススタディ① 検査項目列举			
8	ケーススタディ② 動作観察			
9	ケーススタディ③ 動作分析			
10	ケーススタディ④ 問題点の抽出			
11	ケーススタディ⑤ ICFシート作成			
12	ケーススタディ⑥ まとめ			
13	リハビリテーションの実際① 評価			
14	リハビリテーションの実際② 推論			
15	リハビリテーションの実際③ 治療			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	40%			
レポート・課題	20%	課題への取り組みや結果をもとに評価する。評価基準は別途示す。		
小テスト	20%	複数回実施する。		
その他	20%	課題の提出。評価基準は別途示す。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版		医療情報科学研究所 編	メディックメディア	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
症例動画でわかる理学療法臨床推論 統合と解釈 実践テキスト		豊田輝 編	羊土社	
自由記載				
備考				
中枢神経系理学療法学Ⅰの資料を常に持参すること				

科目名		授業形態	担当教員名	
中枢神経系理学療法学Ⅳ		講義・演習	窪津 秀政	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
15 時間 （ 1 単位）		8 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
脊髄損傷の病態を理解し、評価方法の理解、手技を獲得し、レベル判定が可能になるようにする。基本動作練習や応用動作練習を通じADLが自立していく過程を講義、実技を通じ教授する。評価からのゴール設定を立てられるようにし、理学療法プログラム立案および施行できるよう指導する。				
授業の到達目標				
1. 脊髄損傷の病態・評価方法について説明することができる。 2. 損傷レベル別の理学療法・日常生活自立度についても関係づけ模倣することができる。				
授業計画				
回	内容			
1	脊髄損傷について（疫学、病理、病態、合併症など）			
2	脊髄損傷の評価			
3	頸髄損傷の理学療法（急性期から回復期にかけて）			
4	胸腰髄損傷の理学療法（急性期から回復期にかけて）			
5	（実習）脊髄損傷者を迎えての実技			
6	不全型脊髄損傷の理学療法			
7	（実習）不全損傷者を迎えての実技			
8	ADLと住宅改修			

科目名		授業形態	担当教員名	
小児理学療法学		講義	橋本 栄二	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
正常発達を基にして、小児の運動機能発達障害を呈する代表的疾患についての講義を行う。代表的疾患として、脳性麻痺、重症心身障害児、二分脊椎、ダウン症、発達障害児、子どもの遺伝性疾患について、概念、障害像、異常発達、評価、および治療を知り、障害のある子どもについて理解することを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 脳性麻痺の定義、分類、タイプ別発達、評価、治療について説明できる。 2. 二分脊椎、ダウン症の障害と治療について説明できる。 3. その他、運動発達遅滞、重症心身障害児について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	授業オリエンテーション 16章 療育について			
2	1～3章 運動発達、姿勢反射の発達、正常発達、認知・行動のメカニズム			
3	6章 脳性麻痺総論 定義・分類・原因			
4	7章 脳性麻痺① 痙直型四肢麻痺			
5	8章 脳性麻痺② 痙直型両麻痺			
6	9章 脳性麻痺③ 痙直型片麻痺			
7	10章 脳性麻痺④ アテトーゼ型			
8	11章 二分脊椎			
9	12章 発達障害児			
10	12章 ダウン症候群			
11	13章 子どもの遺伝性疾患			
12	14章 重症心身障害児（者）			
13	15章 子どもの呼吸障害 早産児・低出生体重児			
14	16章 運動発達障害の療育体系と療育指導			
15	その他 まとめ（脳性麻痺・二分脊椎・ダウン症候群）			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	50%	講義範囲内で出題		
レポート・課題	50%	評価基準は別途示す		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
シンプル理学療法学シリーズ小児理学療法学テキスト改訂第4版		細田多穂 監修	南江堂	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
最新理学療法講座小児理学療法学		新田収 編著	医歯薬出版	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
スポーツ障害理学療法学		講義・演習	中山 伸治	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
スポーツ活動は、幼少期の心身機能の向上、中高年の健康維持・増進、QOL向上、トップアスリートの記録更新・勝利など様々な目的で行われている。スポーツ活動で効果や結果を出すためにはトレーニングレベルの向上が必須であるが、向上すればするほど、障害・外傷のリスクに逆に非常に高くなり、スポーツ活動を継続できなくなる選手や愛好家が多い。 本講義では、前半にスポーツ障害・外傷の原因とメカニズム、一般的なケア（ストレッチング、アイシング、テーピング）等について、後半は上肢、体幹、下肢の代表的なスポーツ障害・外傷の発生機序、病態を学習する。				
授業の到達目標				
スポーツ障害のリハビリテーションの知識と技術を習得する。				
授業計画				
回	内容			
1	スポーツ障害・外傷概論			
2	ストレッチング 演習			
3	アイシング 講義			
4	アイシング 演習			
5	上肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（肩関節①）			
6	上肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（肩関節②）			
7	上肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（肘関節）			
8	体幹のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション			
9	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（膝関節①）			
10	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（膝関節②）			
11	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（膝関節③）			
12	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（膝関節④）			
13	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（下腿・足関節①）			
14	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（下腿・足関節②）			
15	下肢のスポーツ障害・外傷のリハビリテーション（下腿・足関節③）			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%			
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
スポーツ外傷・障害に対する術後のリハビリテーション 改訂第3版		園部俊晴 他	運動と医学の出版社	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
疼痛理学療法学		講義・演習	松原 貴子・下 和弘・大賀 智史・服部 貴文	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
疼痛学の基礎ならびに疼痛の発生メカニズム、慢性疼痛の病態など疼痛の神経メカニズムについて学ぶ。また、疼痛の多面性を評価・治療するために、多角的かつ包括的なアセスメント法とリハビリテーション介入法（特に理学療法のなかでも、患者主体の運動療法）について習得することを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 疼痛の基礎，病態，神経メカニズムについて説明することができる。 2. 疼痛の多面的アセスメント法について列挙することができる。 3. 疼痛のリハビリテーション介入法について説明することができる。				
授業計画				
回	内容			
1	疼痛の疫学，定義・分類①			
2	疼痛の疫学，定義・分類②			
3	疼痛の神経生理学① 疼痛の伝達経路			
4	疼痛の神経生理学② 疼痛を抑制するシステム			
5	疼痛の神経生理学③ 疼痛の発生メカニズム			
6	急性痛とは			
7	慢性痛とは① 病態			
8	慢性痛とは② 神経メカニズム			
9	疼痛のアセスメント法① 評価の考え方			
10	疼痛のアセスメント法② 感覚評価、身体機能・活動評価			
11	疼痛のアセスメント法③ 情動・認知評価、社会的QOL評価			
12	疼痛のリハビリテーション介入法① リハビリテーションの有効性			
13	疼痛のリハビリテーション介入法② 運動療法(1) 運動による鎮痛			
14	疼痛のリハビリテーション介入法② 運動療法(2) 行動医学との組み合わせ			
15	疼痛のマネジメント			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%	疼痛の基礎や神経メカニズムについて説明でき、評価や介入の方法を列挙できる点を評価基準とする。		
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
ペインリハビリテーション入門		沖田実・松原貴子	三輪書店	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				
臨床実習や卒後の実臨床で活用、実践できるように、具体例も示しながら講義するので、疼痛に対する正しい理学療法を習得してほしい。適宜、実習も交えて学習を行う予定である。				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法臨床技能演習		演習	福林 秀幸・小堀 博史・小林 正明	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
臨床場面を想定し、症状と検査結果から動作への影響や問題点の列挙を行い、適切な治療項目の選択を行うことができるようになるために、Paper patientを用いてグループに分かれて学ぶ。 OSCEは今までに習得してきた各技術を評価実習、総合臨床実習前後に行うことになるのでOSCEの必要性を知り、実際に患者様に触れて実技を行い技術の向上を図るための準備を行う。				
授業の到達目標				
症状や検査結果から適切な問題点の列挙と治療項目の選択ができるようになる。 OSCE実施に向けて必要性を理解することと、現時点での自分自身の技術を認識し向上のための指標とする。				
授業計画				
回	内容			
1	オリエンテーション OSCEに必要な疾患について 運動器疾患①（事前学習）			
2	OSCEに必要な疾患について 運動器疾患①（発表） 運動器疾患②（事前学習）			
3	OSCEに必要な疾患について 運動器疾患②（発表） 中枢疾患①（事前学習）			
4	中枢疾患②（発表） OSCE概要説明 疾患における医療面接の進め方			
5	OSCE 実技① 運動器疾患 中枢疾患			
6	OSCE 実技② 運動器疾患 中枢疾患			
7	OSCE 実技③ 運動器疾患 中枢疾患			
8	OSCE実技試験 1回目			
9	OSCE実技試験 1回目			
10	OSCE 実技④ 運動器疾患 中枢疾患			
11	OSCE 実技⑤ 運動器疾患 中枢疾患			
12	OSCE 実技⑥ 運動器疾患 中枢疾患			
13	OSCE 実技⑦ 運動器疾患 中枢疾患			
14	OSCE実技試験 2回目			
15	OSCE実技試験 2回目			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題				
小テスト				
その他	100%	2回の実技試験の合計にて判定		
自由記載	詳細な授業の予定に関しては別途配布する。			
教科書				
書名		著者・編集者名		出版社名
なし				
自由記載	必要なものは授業中に配布する			
参考文献				
書名		著者・編集者名		出版社名
PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第2版		才藤栄一 監修 金田嘉清 他編集		金原出版
PT・OTのための臨床技能とOSCE 機能障害・能力低下への介入編		才藤栄一 監修 金田嘉清 他編集		金原出版
自由記載				
備考				
実技試験の日程に関しては後期スケジュールをみて変更する可能性があります。（変更する場合は随時連絡します）				

科目名		授業形態	担当教員名	
地域理学療法学総論		講義・演習	小堀 博史	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
現在の保険・医療・福祉の精度や動向の変化は著しく、地域リハビリテーションの地域理学療法分野においても大きく変化している。本講義では諸制度や関連機関との多職種連携を学び、地域理学療法分野に必要な知識の習得と、主に生活期の理学療法士の役割について理解することを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 地域リハビリテーションと地域理学療法にかかわる知識を習得する。 2. 様々な制度を理解し、諸制度下での理学療法について説明できる。 3. 生活期の理学療法について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	地域リハビリテーション総論			
2	障害と生活の理解			
3	地域理学療法の視点① 生活期の捉え方			
4	地域理学療法の視点② 生活期のリハビリテーション			
5	地域理学療法と制度① 介護保険			
6	地域理学療法と制度② その他の制度（障害者総合支援法）			
7	地域理学療法と制度③ 地域包括ケアシステム			
8	地域理学療法と制度④ 介護サービス 1			
9	地域理学療法と制度⑤ 介護サービス 2（施設サービス）			
10	地域理学療法と制度⑥ 訪問リハビリテーション			
11	地域理学療法の実際① 生活課題			
12	地域理学療法の実際② ケアプラン			
13	地域理学療法の実際③ サービス担当者会議			
14	地域理学療法の実際④ 終末期の考え方			
15	地域理学療法の実際⑤ アドバンス・ケア・プランニング			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	60%			
レポート・課題	10%	講義録を記載し、提出。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他	30%	授業態度（ワークや発表での積極性を評価する）と発表。評価基準は別途示す。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載	随時プリントを配布する。必ず講義録をファイルにまとめること。			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
理学療法学テキスト 地域理学療法学		浅川康吉	メジカルビュー社	
地域リハビリテーション原論		太田仁史	医歯薬出版株式会社	
自由記載				
備考				
・グループでのワークを行います。積極的に参加してください。 ・状況によって進度など変更する場合があります。				

科目名		授業形態	担当教員名	
生活環境学		講義・演習	前川 加奈・酒巻 直美	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
高齢者や障がい者の在宅環境をリハビリテーションの視点で理解することを目的とし、住環境整備、福祉用具について講義を行う。人間の活動と環境の相互作用を理解し、演習を交えながら高齢者や障がい者の生活支援のための生活環境評価、住環境整備の方法、福祉用具の活用について具体的理解を深める。				
授業の到達目標				
1. 住環境整備、福祉用具の基礎知識が理解できる。 2. バリアフリーとユニバーサルデザインについて理解できる。 3. 生活環境整備の流れ、評価、基本的手段が説明できる。 4. 福祉用具の種類、適応について説明できる。 5. 生活環境の整備や福祉用具に関わる制度について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	生活環境学総論			
2	住環境整備総論			
3	住環境整備の基本1：段差・スペース			
4	住環境整備の基本2：手すり・建具			
5	部屋・場所別環境整備の方法1：アプローチ・玄関・廊下			
6	部屋・場所別環境整備の方法2：階段・トイレ・浴室 脱衣室			
7	部屋・場所別環境整備の方法3：台所・寝室			
8	福祉用具1 起居関連用具			
9	福祉用具2 移動関連用具			
10	福祉用具3 排泄関連用具 入浴関連用具 自助具			
11	福祉用具4（演習） 福祉用具の実際 グループワーク			
12	福祉用具5（演習） 福祉用具の実際 グループ発表			
13	ICTとリハビリテーション ロボットリハビリテーション			
14	介護保険制度における住環境整備			
15	地域環境のバリアフリー化 生活環境学のまとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	70%			
レポート・課題	25%	課題への取り組みや内容をもとに評価する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他	5%	講義録の提出。評価基準については別途示す。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載	随時資料配布			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学専門分野 日常生活活動・生活環境学 第6版		鶴見隆正・隆島研吾 編集	医学書院	
福祉住環境コーディネーター検定試験2級・3級公式テキスト		東京商工会議所（編）	東京商工会議所	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
臨床実習Ⅱ		実習	坂東 恵美子・福林 秀幸・前川 加奈 小林 正明・谷 和真・小堀 博史	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
135 時間 （ 3 単位）		回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
評価実習(理学療法評価の一連の過程を理解・経験する実習) 患者さまの疾患・症状から適した情報・検査項目を挙げ、検査を見学・協同参加・実施する。各検査結果の関連を説明し、患者さまの抱える問題点を挙げ障害像を把握する。				
授業の到達目標				
1.適切な身だしなみ、共感的態度をもって、より良い人間関係が構築できる。 2.対象者に対して医療人としての対応ができる。 3.理学療法士の施設での位置づけ、業務内容が理解できる。 4.検査項目・情報収集項目の抽出・取捨選択の理由を説明できる。 5.学生により実施されるべき評価項目(水準Ⅰ)を実践することができる。 6.検査結果の関連性について説明できる。 7.対象者が抱える課題を抽出し、その抽出理由について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
	実習前オリエンテーション			
	施設実習 1週目			
	施設実習 2週目			
	施設実習 3週目			
	実習後報告会			

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法特論Ⅳ		演習	福林 秀幸・坂東 恵美子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	2 年次	後期
授業の目的・概要				
・ 学生生活において理学療法士としての基本的資質の向上を目指す。 ・ 臨床実習・国家試験に向けての知識・技術の向上を図る。 ・ 他学年との合同授業を通して検査測定技術の向上を図る。 ・ 学生生活を円滑に行うための連絡事項を伝える。				
授業の到達目標				
・ 知識の整理、技術向上を図り日々の講義や臨床現場に活かすことができる。 ・ 学校生活を円滑に行うことができる。				
授業計画				
回	内容			
1	学生生活オリエンテーション①			
2	学生生活オリエンテーション② 2年後期の自己目標を考える			
3	科目学習・演習① 疾患に合わせた実技練習（脊損）			
4	科目学習・演習② 疾患に合わせた実技練習（脊損）			
5	科目学習・演習③ 疾患に合わせた実技練習（脳血管障害 変形性膝関節症 頸椎症性神経根症）			
6	科目学習・演習④			
7	科目学習・演習⑤ 疾患に合わせた実技練習（脳血管障害 変形性膝関節症 頸椎症性神経根症）			
8	評価実習に向けて 手引きの説明			
9	評価実習に向けて 資料作成			
10	評価実習に向けて 資料完成			
11	科目学習・演習⑥			
12	評価実習オリエンテーション①			
13	評価実習オリエンテーション②			
14	評価実習オリエンテーション③			
15	評価実習オリエンテーション④			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	100%	講義で出題する課題提出、課題内容、課題に取り組む姿勢で判断する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載	適宜資料を配布する			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				
授業内での取り組みから3年生に向けて自己学習・自己研鑽に励むこと。				